

中国における小楊枝について*

周 大 成**

要 約

中国における小楊枝（爪楊枝）の種類はきわめて多く、その長、短、大、小も色々であり、製造方法も異っている。本文においては中国における小楊枝について筆者の考察した一端を報告したいと思う。

（キーワード）

小楊枝、『本草綱目』、『金瓶梅詞話』、『紅樓夢』、『清代北京竹枝詞』。

1. は し が き

中国における口腔清掃用具の種類としては、小楊枝、房楊枝、セット式口腔清掃用具、植毛式歯ブラシ等があるが、本篇においては小楊枝だけを紹介することにする。

2. 小楊枝について

中国では小楊枝を剔牙簃、剔牙枝、又は牙簃及び牙枝と称して、その起源は相当に古く、新石器時代の人頭骨及び殷商時代の首都である河南省安陽地区より発掘した下顎骨の歯牙にも小楊枝を使用して歯をえぐる痕跡が見られ、毛燮均らはこれを「剔牙痕跡」と称していた¹⁾。

漢末三国時代呉国の現江西省南昌市の基本建設工地において、東呉の將軍、或いは將軍よりやや低い地位の高榮墓より金製の耳搔のついた小楊枝

を発見し、器物の全体が龍の形を呈して、尾部が小楊枝の尖端であり、龍首の口腔内より長い舌が突出して、杓状の耳搔になっている²⁾。

晋代の陸雲（262～303）が兄である陸机（261～303）に与える書に曰く「一日行曹公品物、有剔牙簃、今以一枚寄兄」と称しており、これを評せば「陸雲がある日曹公の器を整理する時に小楊枝があったので、一枚兄に贈る」と云うことが手紙に書いてあったので、これはおそらく金属製のものであったと思われるが、もし一般の木製小楊枝であれば、贈る必要が無かったと考えている。（尚二人とも成都王である司馬穎に殺された。時は303年）³⁾。

元代の画師である趙夢頰（1254～1322）が『老態』の詩に「扶衰每藉過頭杖、食肉光尋剔牙簃」の句があり、これは「衰えを扶ける度毎に過頭の杖に頼り、肉を食べる前には先ず小楊枝を搜す」と云って、老人が歩く時には杖、食事の時には小楊枝と共に手離すことの出来ない生活必需品になっていた。過頭の杖とは頭の高さを越す杖のことで、昔の年寄りが用いたものである⁴⁾。

明代万歴24年（1596）に李時珍が編成した『本草綱目』巻36柳の部に中国の小楊枝は柳の木でこしらえることが記してあり、それは「柳枝去風消腫止痛、其嫩枝削刃牙杖、剔齒甚妙」と称している。これを評せば「柳枝は風を去り、腫を消し、痛を止める。その嫩枝を削り、牙杖にして歯をえぐるが甚だ妙である」と述べている⁵⁾。

万歴45年（1617）に編成した『金瓶梅詞話』に「伯爵吃的臉紅紅的、帽簷上挿着剔牙簃」と記述しており、評せば「伯爵が食後に真赤な顔をし

* The Chinese small toothpicks

** Zhou Dacheng: Capital Medical College School of Stomatology 首都医学院口腔医学系

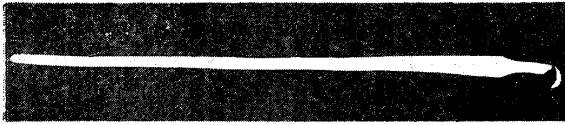


図1 明万歴31年に下葬した益宣王朱翊鉞の耳控のついた金製小楊枝

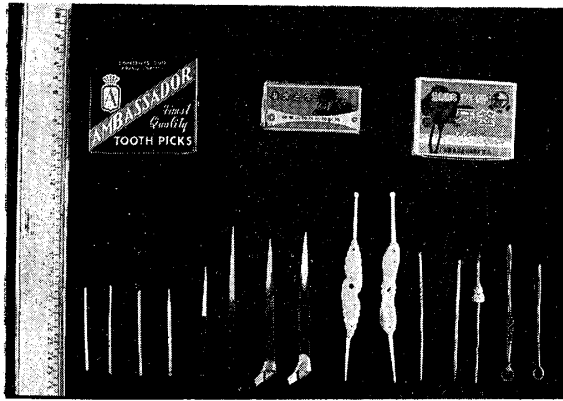


図2 上方、向って右側と中央は葵骨製、左側は柳木製小楊枝の商標

下方、向って右より数えて1～4は銀製、5はアルミニウム、6は駝骨（魚形）、7は葉形、8～15は植物製の小楊枝

て、帽子の底に小楊枝を挿しこんでいる」とのことである。帽子に小楊枝を挿すことは外国にも流行していたもので、シェクスピア時代にもあったものである⁶⁾⁷⁾。

1957年に江蘇省歴史博物館が明代万歴31年(1603)に下葬した益宣王朱翊鉞の金製小楊枝を発見し、これも一端が耳搔で、あとの一端が尖端になっており、長さが11.7cmで、重量は9.5gであった⁸⁾(図1)。

清の乾隆時代に曹雪芹の有名な著作である『紅樓夢』第28回に「只見鳳姐兒在門前站着、拿耳控子剔牙」、即ち「鳳姐兒が門の前に立って、耳搔で歯をえぐっている」と謂ふのは、彼の女が耳控のついたあとの一端で歯をえぐっているもので、これは耳控のついた小楊枝のことである⁹⁾。

該書の第52回に「晴雲向枕辺拿起一丈青来、向他(墜兇)手上乱戳、即ち「暗雲が枕もとから一丈青を出して彼の女(墜兇)を手をやたらに刺した」、同書の註に依れば「一丈青」は一種の簪の様なもので、一端が尖っており一端が杓状にし

て、一般では「耳控」と謂ふが、これも一種の金属製小楊枝である¹⁰⁾。

清乾隆38年(1773)に曹庭棟が編成した『老老恒言』に「食后微滓留齒間隙、最前齒累、以柳木削簞剔除務淨」と叙述している、その大意は「食後に渣滓が齒間に残留すると齒が最も累らわされるので、柳枝を削って牙簞(小楊枝)できれいに除去すべきものである」と主張している¹¹⁾。

清代の楊米人らが著した『清代北京竹枝詞』に「柳木牙簞」と謂う詞があり、内容は「取材堤畔削纖纖、一束将来市肆筵、好待酒闌賓未散、和盤托与衆人拈」と柳で小楊枝を作ることが記載している。その内容は「材を堤の傍より取り、纖細に削って一束にして将来の安全に用いる、酒の半ばで客の未だ帰らぬ時に皿に入れて衆人にのみ取らせる」、と柳木爪楊枝のことを述べている。竹枝詞は唐代の詩人である劉禹錫が当代の民歌を改作した新詞にして、その後各代の詩人が当時の風俗、風光を七言絶句の形式で発表したものである¹²⁾。

3. む す び

中国における小楊枝を作る材料は、金、銀、銅、アルミニウム等の金属材料の外に、象牙や駝骨(ラクダの骨)等の動物性材料をも使用する。特に多く使うものは白楊(aspen)、柳、樺木(birch)、竹、棕櫚(palm)等の植物性材料をも使用する。

駝骨で製作した小楊枝は芸術品として魚やその他形をした耳搔と小楊枝の附属しているものが比較的によく発売している。象牙で手作りした色々の形をした芸術品としての小楊枝は昔はあったが、現在ではあまり見られなくなった様である(図2)。

植物性小楊枝も各地で発売しているが、一番多く製作している所は広東省の新会県の会城地区で、此処では棕櫚を葵と称して、葵の葉脈の中浅部分を葵骨と称して、此の部分を応用して作った小楊枝を「葵骨牙簞」として製造発売しているが、これは絶対に向日葵の莖で製作したものではない。葵骨牙簞の性能は楊木や柳木牙簞の様に齒間にはさまって折り込む様なことが少なく、堅韌不

折の優點があり、そして葵は小楊枝の外に扇子や幅子等を製造することも出来るとのことである。

参考文献

- 1) 毛變均，顔間，安陽輝県殷代人牙取 研究 報 告，『古脊椎動物與古人類』，1(4)：165-172，1959)
- 2) 周大成，江西省南昌市東吳時代高榮墓より出土した金製小楊枝について，『日本齒科医史学会会誌』，8(2)：24-25，1981.
- 3) 李濤：中学口腔医学大綱，『中国口腔科雜誌』，4：273-241，1955.
- 4) 步雲鶚，『養寿詩歌』，上卷，頁6，財政部印刷局印，北京，1925.
- 5) 李時珍：『本草綱目』，卷35，柳部，頁48，商務印書館，上海，初版，1930.
- 6) 明万歷丁巳年刊本，『金瓶梅詞話』，卷8，第32回，文学古籍刊行会印行，北京，1958.
- 7) 丹羽源男：「Folklore of the teeth」にみる楊枝(その2)，『日本齒科医史学会会誌』，12(4)：232，1986.
- 8) 江西省歷史博物館刘林(千人)通信，1980.
- 9) 曹雪芹，高鶚：『紅樓夢』，第28回，頁220，人民文学出版社，北京，1972.
- 10) 同書，第52回，頁652.
- 11) 曹庭棟：『老老恒言』，乾隆38年(1773)，同治9年刊本.
- 12) 楊米人学：『清代北京竹枝詞』，北京出版社，頁84，1962.

住所：中国北京王府井大街黄图岗40号 周大成